

地方小都市における人口の地理的移動の趨勢分析

野邊 政雄

高梁市は、岡山県の中西部に位置する地方小都市である。本稿では、1965年、1975年、1985年、1995年、2000年における、高梁市の人口の地理的移動に関するデータを検討しその趨勢を明らかにした。

Keywords：地理的移動，転入・転出，純移動数，地方小都市

1 本稿の目的

高齢者は別居子をはじめとする周囲にいる多くの人々からソーシャル・サポートを受けながら、毎日の生活をおくっている。筆者は岡山県の中西部に位置する地方小都市である高梁市（2000年の国勢調査人口、25,374人）で高齢女性を対象に調査をおこない（図1を参照）、高齢女性が別居子からソーシャル・サポートを入手できるかどうかを規定する要因を追究したことがある（野辺 2003）¹⁾。そして、別居子との距離は高齢女性が別居子からソーシャル・サポートを入手できるかどうかを大きく左右する重要な要因であり、別居子が近くに居住している

ほど、高齢女性はその別居子から手段的サポートを入手できたり、その別居子と「交遊」をしていただけでなく、その別居子から情緒的サポートも入手できることを明らかにした。

高梁市で地理的移動をする人々がすべて高梁市に住む高齢者の別居子というわけではない。けれども、地理的移動をする人々の多くが若者であるから、同市における人口の地理的移動がこれまでどうであったかを明らかにすれば、現在における別居子の居住場所の分布を説明できるし、将来における別居子の居住場所の分布を予測することもできる。その予測から、同市の高齢者は別居子から近い将来ソーシャル・サポートを入手できやすくなるのかどうかを推論できるだろう。こうしたことから、筆者は高梁市における人口の地理的移動に関心を持つようになり、データを集めた。本稿では、高梁市における人口の地理的移動のデータを1965年から10年ごとに時系列的に見てゆき、同市における地理的移動の趨勢を明らかにしたい。



図1 高梁市の位置図

2 データと分析方法

本稿では、1965年、1975年、1985年、1995年の地理的移動を検討する。さらに、最新の動向を見るために、2000年のデータも検討する。これらの年には、経済史の上で次のようなことが起こっていた。1965年に、日本は高度経済成長のまただ中にあった。1971年のニクソン・ショックと1973年の第1次オイル・ショックによって、高度経済成長は終

焉をむかえた。1975年は、高度経済成長が終わった直後の年であった。日本はその2つのショックを西欧諸国に先駆けて乗り越えて、世界経済における地歩を固めていった。1980年には日本の自動車生産台数が世界第1位となり、1984年には自らを「中流」と考える国民が90%を越えるようになった。1985年をすぎてまもなく、日本はバブル経済に入っていた。1990年代に入るとともに、バブル経済は崩壊した。1995年と2000年に、日本はバブル経済崩壊後の長い不況の中にあった。

地理的移動のデータは、岡山県庁が1965年から毎年発行している『岡山県人口の動き（毎月流動人口調査から）』（岡山県企画部統計課 1966）から取った。このデータは住民基本台帳にもとづいている。その統計書では、当初4月から翌年の3月までを1年間として集計していたが、1984年からは前年の10月から同年の9月までを1年間として集計している。この変更のために、1965年と1975年は同年の4月から翌年の3月までを1年間として集計しているが、1985年、1995年、2000年は前年の10月から同年の9月までを1年間として集計している。

高梁市は1970年に賀陽町上竹と西の一部を合併したので、1965年における市域は現在のそれとは少し違っている。高梁市は地方自治体全体でなくその一部を合併したので、1965年の高梁市のデータを現在の市域に直して集計することはできない。そこで、1965年のデータは当時における市域のデータをそのまま用いる。合併した地域はそれほど広くはないから、そのデータは現在の市域のデータとあまり差がないと考えられる。

ある地域で発生する人口の地理的移動を表示する指標として、転入者数、転出者数、純移動数がある。転入者数とはある地域に流入した人数であり、転出者数とはそこから外に流出した人数である。通例、1つの地域において人口の転入と転出が同時に発生するので、その数的な差と方向を考えることができる。これが、純移動数である。例えば、都市Aから都市Bに1500人の移動があり、都市Bから都市Aに1000人の移動があるとすると、都市Aから都市Bへの500人の転入超過が純移動数である。さて、転入者数と転出者数は純移動数と必ずしも関連していない。このことは、次のような例で理解できるだろう。人口の移動が都市Aと都市Bとの間でほとんど発生していないとき、純移動数は少ない。また、大量の人口移動が都市Aから都市Bにあり、同時に、同じくらい大量の人口移動が都市Bから都市Aにあるときも、純移動数は少なくなる。この例のように、転入者数と転出者数は純移動数と関連しているわけ

ではないから、転入者数と転出者数だけでなく、純移動数をも検討する必要がある。

本稿では、高梁市への転入者数、同市からの転出者数、純移動数を、県内との移動、県外との移動、すべての移動（県内との移動と県外との移動の合計）ごとに見てゆく。県内との移動というのは高梁市と岡山県内にある他の市町村との間で起こる地理的移動であり、県外との移動というのは高梁市と岡山県外との間で起こる地理的移動である。すべての移動についての転入者数、転出者数、純移動数をそれぞれ総転入者数、総転出者数、総純移動数とここでは呼んでおく。ところで、高梁市の人口は1965年から絶えず変化しているので、それぞれの時点における高梁市の人口と比べて転入者数、転出者数、純移動数がどのくらい大きいかは人数では分らない。そこで、転入者数、転出者数、純移動数をそれぞれの時点における高梁市の国勢調査人口で割って、転入率、転出率、純移動率を算出する²⁾。

3 移動の総論

1965年、1975年、1985年、1995年、2000年における、高梁市への転入者数、同市からの転出者数、同市との純移動数を、県内との移動、県外との移動、すべての移動ごとに表1の上段に示す。さらに、そのデータから転入率、転出率、純移動率を計算し、表1の下段に示す。

第1に、転入率と転出率を時系列的に見てゆく。まず、県内からの転入率と県内への転出率である。表1の下段より、県内からの転入率は1975年に2.2%であり、1985年に2.3%であるから、1985年の値が1975年の値よりも0.1%大きいことが分かる。この例外はあるが、全体的に見ると、県内からの転入率は最近になるにつれてだんだんと減少している。県内への転出率は、1975年が1965年よりも0.2%高く、2000年が1995年よりも0.2%高い。しかし、全体的には、県内への転出率もまた最近になるにつれてだんだんと減少する傾向がある。このように、高梁市と県内にある他の市町村との間で転入や転出をする人々の割合がだんだんと低くなっている。

次に、県外からの転入率と県外への転出率に眼を向けよう。1985年、1995年、2000年には1965年や1975年よりも、県外からの転入率が高い。1995年と2000年に転入率が高かったのは、吉備国際大学が開学し、県外から学生が転入するようになったからと考えられる。県外への転出率は、1965年と1985年において高い。景気がよくて県外で就業機会が増えたから、県外への転出者が両年に多かったのだろう。不景気であった1975年、1995年、2000

表1 高梁市における人口の地理的移動

	県 内			県 外			総転入	総転出	総純移動
	転 入	転 出	純移動	転 入	転 出	純移動			
	人数 (単位: 人)								
1965年	746	1004	-258	533	784	-251	1279	1788	-509
1975年	610	945	-335	427	462	-35	1037	1407	-370
1985年	622	780	-158	564	707	-143	1186	1487	-301
1995年	483	638	-155	591	547	44	1074	1185	-111
2000年	460	676	-216	528	526	2	988	1202	-214
	率 (単位: %)								
1965年	2.4	3.2	-0.9	1.7	2.5	-0.8	4.1	5.7	-1.6
1975年	2.2	3.4	-1.2	1.5	1.7	-0.1	3.7	5.1	-1.3
1985年	2.3	2.9	-0.6	2.1	2.7	-0.5	4.5	5.6	-1.1
1995年	1.9	2.5	-0.6	2.3	2.1	0.2	4.1	4.6	-0.4
2000年	1.8	2.7	-0.9	2.1	2.1	0.0	3.9	4.7	-0.8

(注) 上段は人数であり、下段はそれぞれの年における国勢調査人口を母数とした率である。

年には県外への転出率が低く、とくに1975年におけるその低さが目立つ。こうして見ると、県外への転出率は景気によって影響をうけてきたことが分かる。

以上のような県内および県外との地理的移動の結果、総転入率は1985年に最も高く、1975年に最も低い。また、総転出率は景気がよかった1965年と1985年に高いのに対し、1995年と2000年に低い。

第2に、純移動率を時系列的に検討したい。まず、県内との純移動率である。その率はいずれの年においても負であることから、ずっと県内へ転出超過であったことが分かる。1975年に純移動率の絶対値が最も大きくなっており、県内への転出超過が最も大きい。

次は、県外との純移動率である。1965年、1975年、1985年にその割合は負であり、県外へ転出超過であった。景気がよかった1965年と1985年に純移動率の絶対値が大いから、県外への転出超過が大きいたことが分かる。ところが、純移動率は1995年に正に転じ、わずかではあるが県外から転入超過となった。2000年には純移動率は0となり、県外との移動によっては人口がほとんど増減しなくなった。

総純移動率を見ると、いずれの年においてもその値は負であるから、高梁市から転出超過であったことが分かる。1965年から1995年までその絶対値がだんだんと小さくなり、転出超過がだんだんと小さくなった。ところが、2000年にはその絶対値が少し増え、転出超過が1995年よりも少し大きくなった。

第3に、県内との移動と県外との移動の大きさを比較する。まず、転入率と転出率である。表1から、1965年、1975年、1985年には県内からの転入率は県外からの転入率よりも高いことを読み取れる。

1965年の転入率を例に引けば、県内からの転入率は2.4%であり、県外からの転入率は1.7%であるというように、県内からの転入率は県外からの転入率よりも高い。ところが、1995年と2000年には、逆に、県外からの転入率のほうが県内からの転入率よりも高い。このように、1965年、1975年、1985年には、県外からよりも県内から多くの転入者があったが、1995年と2000年にその傾向は逆転し、県外からの転入者が県内からの転入者よりも多くなった。これは、1990年に吉備国際大学が開学し、学生が県外から高梁市に転入するようになったからであろう。転入率とは違って、転出率の傾向は一貫しており、県内への転出率はいずれの年においても県外への転出率よりも高い。つまり、県内への転出者のほうが県外への転出者よりもすべての年で多かった。

次に、県内との純移動率と県外との純移動率を比較する。1965年、1975年、1985年には、県内との純移動率も県外との純移動率も両方が負であり、県内へも県外へも転出超過であった。その絶対値は県内との純移動率のほうが大きく、1975年にはその差は顕著である。1995年には、県内との純移動率は負であり、県内へ転出超過であったのに対し、県外との純移動率は正であり、県外から転入超過であった。その絶対値は県内との純移動率のほうが大きい。2000年には、県内との純移動率は負であり、県内へ転出超過であったが、県外との純移動率は0となり、県外との移動による人口の増減はほぼ0となった。当然のことながら、その絶対値は県内との純移動率のほうが大きい。これらのことから、いずれの年においても、県外との移動よりも県内との移動が地理的移動による高梁市の人口増減（社会増加・減少）に大きな影響を及ぼしたことが分かる。

4 県内との移動

岡山県内にあるどの市町村から高梁市へ転入し、高梁市から県内にあるどの市町村へ転出しているかを検討する。高梁市との転入者数や転出者数は多くの市町村では毎年10人以下と少なく、すべての市町村の転入者数や転出者数を提示すると全体的な傾向が分かりづらくなってしまう。そこで、転入者数あるいは転出者数がこれまでに30人を越えたことがある岡山市、倉敷市、総社市、新見市のデータだけを表2に掲げることとする。さて、高梁市、有漢町、北房町、賀陽町、成羽町、川上町、備中町は社会・経済的にまとまりのある都市圏を形成しており、高梁市がその都市圏の中心である(図1を参照)。そこで、高梁市を除いた6町を高梁都市圏とし、高梁市と高梁都市圏との間の転入者数と転出者数を集計し、表に加えた。それらの市と高梁都市圏からの

表2 高梁市と県内にある市および高梁都市圏との間の転入者数と転出者数 (単位:人)

	転入者数(%)	転出者数(%)	純移動数
1965年			
岡山市	181(24.3%)	346(34.5%)	-165
倉敷市	164(22.0%)	323(32.2%)	-159
総社市	36(4.8%)	55(3.5%)	-19
新見市	68(9.1%)	43(4.3%)	25
高梁都市圏	166(22.3%)	71(7.1%)	95
1975年			
岡山市	171(28.3%)	306(32.4%)	-135
倉敷市	103(16.9%)	201(21.8%)	-98
総社市	44(7.2%)	117(12.4%)	-73
新見市	43(7.1%)	37(3.9%)	6
高梁都市圏	118(19.3%)	74(2.8%)	44
1985年			
岡山市	190(31.0%)	278(35.6%)	-88
倉敷市	118(19.0%)	148(19.0%)	-30
総社市	46(7.4%)	88(11.3%)	-42
新見市	37(6.0%)	33(4.2%)	4
高梁都市圏	110(17.7%)	108(13.9%)	2
1995年			
岡山市	137(28.4%)	203(31.8%)	-66
倉敷市	73(15.1%)	111(17.4%)	-38
総社市	53(11.0%)	97(15.2%)	-44
新見市	36(7.5%)	8(1.3%)	28
高梁都市圏	85(17.6%)	86(13.5%)	-1
2000年			
岡山市	121(26.3%)	217(32.1%)	-96
倉敷市	67(14.6%)	111(16.4%)	-44
総社市	53(11.5%)	106(15.7%)	-53
新見市	45(9.8%)	38(5.6%)	7
高梁都市圏	86(18.7%)	109(16.1%)	-23

(注) 市や高梁都市圏から高梁市への転入者数と高梁市からそこへの転出者数である。括弧内の数字は、それぞれの年における県内からの転入者総数ないし県内への転出者総数を母数としたパーセンテージである。岡山市と倉敷市の市域変更されているが、現在の市域に直して集計した。

転入者数がそれぞれの年における県内からの転入者総数の中に占める割合、および、それらの市と高梁都市圏への転出者数がそれぞれの年における県内への転出者総数の中に占める割合を計算し、表2の括弧内に示す。

第1に、それぞれの市や高梁都市圏からの転入者数とそこへの転出者数を時系列的に追ってゆきたい。まず、いずれの年でも、ある市や高梁都市圏から高梁市への転入者は高梁市からそこへの転出者と人数でかなり近いことを表2から読み取ることができる。例えば、1965年には総社市から高梁市への転入者は36人いたが、高梁市から総社市への転出者は55人であった。

次に、いずれの年においても、高梁市は岡山市や倉敷市との間で転入者や転出者が多いことを表2から読み取れる。とくに、岡山市と倉敷市への転出者が非常に多いことが目につく。例えば、1965年には、岡山市からは181人の転入者があり、これは県内からの転入者の24.3%を占めている。また、同年に岡山市へ346人も転出者があり、これは県内への転出者総数の34.5%である。岡山市は岡山県における行政や商業の中心都市であり、倉敷市に次ぐ工業都市である。また、倉敷市は水島臨海工業地帯をかかえ、重化学工業の中心地として発展してきた。地方中核都市である両市には就業の機会が多いことから、岡山市や倉敷市への転出者が多かったのであろう。ただし、岡山市や倉敷市との間の転入者と転出者は最近になるにつれてだんだんと少なくなっている。

総社市への転出者は1975年に117人であるが、1985年に88人に減っている。この点を除けば、総社市との転入者と転出者は最近になるにつれてだんだんと増えている。なかでも、総社市への転出者の伸びが著しい。総社市は高梁市の南隣にあり、岡山市や倉敷市の近郊住宅地として、また、内陸工業地域として1965年ころから発展している。総社市がこのように発展してきているから、総社市との間の転入者や転出者がだんだんと多くなっていったのだろう。その結果、2000年には、総社市との間の転入者や転出者は倉敷市との間の転入者や転出者に近いくらいにまで多くなっている。

新見市は高梁市の北隣にある地方小都市で、山陽と山陰を結ぶ交通の要衝である。近年、過疎化や高齢化が同市で進んでいる。1965年には、新見市から高梁市への転入者は68人であり、高梁市から新見市への転出者は43人であった。1995年に高梁市から新見市への転出者が8人になったことを除けば、1975年以降は、転入者と転出者は、30人台から40人台で安定している。

高梁都市圏から高梁市への転入者は1965年には166人と多かったが最近になるにつれてだんだんと少なくなっている。そして、2000年には86人と1965年の約半数になった。転入者とは違って、高梁市から高梁都市圏への転出者は最近になるにつれてだんだんと増えている。転出者は1995年に1985年よりも少し減少したが、2000年には再び増加し、109人になった。

第2に、純移動数を時系列的に見てゆきたい。表2より、岡山市、倉敷市、総社市との純移動数はいずれの年においても負であり、高梁市からそれらの市へはすべての年で転出超過であることを読み取れる。つまり、地方中核都市とその近郊住宅地へ転出超過であったのだ。

岡山市への転出超過の人数は1965年に165人と多かったが、最近になるにつれてだんだんと少なくなり、1995年には66人にまで少なくなった。2000年には、その人数は96人と1995年よりも増えている。こうした増減があるが、いずれの年においても、岡山市への転出超過の人数が最も多い。

倉敷市への転出超過の人数は1965年に159人と多かったが、岡山市と同じようにだんだんと少なくなり、1985年には30人にまで減った。その人数は1995年には44人、2000年には53人と1985年よりも少し増えている。

総社市への転出超過の人数は1965年には19人と少なかったが、1975年には73人にまで増えた。1985年、1995年、2000年には、その人数は40人台から50人台で安定している。倉敷市への転出超過の人数は1965年以降だんだんと少なくなっている。1985年、1995年、2000年における総社市への転出超過の人数は倉敷市への転出超過の人数よりも多くなっている。

これら3市とは対照的に、高梁市は新見市からいずれの年においても転入超過である。それから、1965年には高梁市は高梁都市圏から95人の転入超過であったが、その後その人数は減少している。1995年と2000年には、純移動数は逆に負となり、高梁市は高梁都市圏へいくらかの転出超過となっている。

5 県外との移動

県外のどの地方（大都市圏）から高梁市に転入し、高梁市から県外のどの地方（大都市圏）へ転出するのかを検討したい。1965年、1975年、1985年、1995年、2000年において、県外から高梁市への転入者数、同市から県外への転出者数、同市と県外との純移動数を地方ごとにまとめ、表3に示す。また、

表3 高梁市と各地方との間の転入者数と転出者数
(単位:人)

	転入者数(%)	転出者数(%)	純移動数
1965年			
北海道地方	6(1.1%)	1(0.1%)	5
東北地方	1(0.2%)	4(0.5%)	-3
関東地方	58(10.9%)	95(12.1%)	-37
中部地方	18(3.4%)	42(5.4%)	-24
近畿地方	215(40.3%)	399(50.9%)	-184
中国地方	214(40.2%)	205(26.2%)	9
四国地方	7(1.3%)	19(2.4%)	-12
九州地方	13(2.4%)	19(2.4%)	-6
外国	1(0.2%)	0(0%)	1
合計	533(100%)	784(100%)	-251
1975年			
北海道地方	5(1.2%)	7(1.5%)	-2
東北地方	2(0.5%)	6(1.3%)	-4
関東地方	51(11.9%)	78(16.9%)	-27
中部地方	34(8.0%)	26(5.6%)	8
近畿地方	164(38.4%)	190(41.1%)	-26
中国地方	104(24.4%)	89(19.3%)	15
四国地方	33(7.7%)	22(4.8%)	11
九州地方	34(8.0%)	41(8.9%)	-7
外国	0(0%)	3(0.7%)	-3
合計	427(100%)	462(100%)	-35
1985年			
北海道地方	6(1.1%)	2(0.3%)	4
東北地方	7(1.2%)	4(0.6%)	3
関東地方	36(6.4%)	63(8.9%)	-27
中部地方	15(2.7%)	23(3.3%)	-8
近畿地方	252(44.7%)	313(44.3%)	-61
中国地方	189(33.5%)	229(32.4%)	-40
四国地方	25(4.4%)	32(4.5%)	-7
九州地方	34(6.0%)	35(3.0%)	-1
外国	0(0%)	6(0.9%)	-6
合計	564(100%)	707(100%)	-143
1995年			
北海道地方	1(0.2%)	0(0%)	1
東北地方	2(0.3%)	5(0.9%)	-3
関東地方	36(6.1%)	41(7.5%)	-5
中部地方	32(5.4%)	26(4.8%)	6
近畿地方	184(31.1%)	217(39.7%)	-33
中国地方	187(31.6%)	166(30.4%)	21
四国地方	73(12.4%)	45(8.2%)	28
九州地方	74(12.5%)	43(7.9%)	31
外国	2(0.3%)	4(0.7%)	-2
合計	591(100%)	547(100%)	44
2000年			
北海道地方	1(0.1%)	3(0.6%)	-2
東北地方	13(2.5%)	3(0.6%)	10
関東地方	42(8.0%)	56(10.7%)	-14
中部地方	39(7.4%)	28(5.3%)	11
近畿地方	155(29.4%)	183(34.8%)	-28
中国地方	161(30.5%)	156(30.0%)	5
四国地方	55(10.4%)	50(9.5%)	5
九州地方	55(10.4%)	40(7.6%)	15
外国	7(1.3%)	7(1.3%)	0
合計	528(100%)	526(100%)	2

(注) 各地方から高梁市への転入者数と高梁市から各地方への転出者数である。括弧内の数字は、それぞれの年における県外からの転入者総数ないし転出者総数を母数としたパーセンテージである。

表4 高梁市と3大都市圏との間の
転入者数と転出者数

(単位：人)

	転入者数(%)	転出者数(%)	純移動数
1965年			
東京圏	53(9.9%)	93(11.9%)	-40
名古屋圏	10(1.9%)	29(3.7%)	-19
大阪圏	195(37.0%)	385(49.1%)	-190
1975年			
東京圏	48(11.2%)	73(15.8%)	-25
名古屋圏	15(3.5%)	17(3.7%)	-2
大阪圏	156(36.5%)	173(37.5%)	-17
1985年			
東京圏	35(6.2%)	61(8.6%)	-26
名古屋圏	13(2.3%)	17(2.4%)	-4
大阪圏	244(43.3%)	306(43.3%)	-62
1995年			
東京圏	28(4.7%)	38(7.0%)	-10
名古屋圏	7(1.2%)	14(2.6%)	-7
大阪圏	168(28.4%)	204(37.3%)	-36
2000年			
東京圏	38(7.2%)	52(9.9%)	-14
名古屋圏	15(2.8%)	21(4.0%)	-6
大阪圏	138(26.1%)	165(31.4%)	-27

東京圏 埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県
 名古屋圏 愛知県・三重県
 大阪圏 京都府・大阪府・兵庫県

(注) 3大都市圏から高梁市への転入者数と高梁市から3大都市圏への転出者数である。括弧内の数字は、それぞれの年における県外からの転入者総数ないし転出者総数を母数としたパーセンテージである。

そのデータを3大都市圏についてまとめて、表4に示す。各地方(大都市圏)からの転入者数がそれぞれの年における県外からの転入者総数の中に占める割合、および、各地方(大都市圏)への転出者数がそれぞれの年における県外への転出者総数の中に占める割合を計算し、表3と表4の括弧内に示す。

第1に、それぞれの地方(大都市圏)からの転入者数とそれぞれの地方(大都市圏)への転出者数を時系列的に見てゆきたい。まず、ある地方(大都市圏)からの転入者数とその地方(大都市圏)への転出者数はかなり均衡していることを表3と表4から読み取れる。つまり、ある地方から高梁市への転入者が多いと高梁市からその地方(大都市圏)への転出者もやはり多く、逆に、ある地方から高梁市への転入者が少ないと高梁市からその地方(大都市圏)への転出者もやはり少ない傾向がある。例えば、1965年には、四国地方から高梁市への転入者は7人であり、高梁市から四国地方への転出者は19人である。

次に、いずれの年においても、高梁市への転入者と同市からの転出者が多い地方は地理的に近い近畿地方と中国地方であることを表3から読み取れる。また、高梁市は近畿地方のうちでもとくに大阪圏と

の間で転入者と転出者が多いことを表4から看取できる。例えば、1965年には、大阪圏から高梁市への転入者は195人もあり、高梁市から大阪圏への転出者は385人にもものぼる。

年によって、それぞれの地方(大都市圏)からの転入者やそこへの転出者に増減があるが、増減の幅が大きいのは近畿地方、とくに大阪圏への転出者であることが表3と表4を時系列的に見てゆくと分かる。表4から、大阪圏への転出者は景気がよかった1965年に385人、1985年に306人と多いのに対し、不景気であった1975年に173人、1995年に204人、2000年に165人と少ないことを読み取れる。1965年と1985年に高梁市から県外へ転出者が多かったことは、前述の通りである。そのとき多くの人々が向かった転出先が大阪圏であったということを、そのことは表している。

大阪圏や中国地方から高梁市への転入者や高梁市から大阪圏や中国地方への転出者が多いことを既に明らかにした。そうした転入者は移動前にどの府県に住んでいたか、また、そうした転出者は移動後にどの府県に住んだのかを明らかにするために、表3のデータを大阪府、兵庫県、広島県について集計し、表5に示す。

大阪圏(京都府、大阪府、兵庫県)との間で転入者や転出者が多かったが、その大部分は大阪府や兵

表5 高梁市と主要な3府県との間の
転入者数と転出者数

(単位：人)

	転入者数(%)	転出者数(%)	純移動数
1965年			
大阪府	116(21.8%)	230(29.3%)	-114
兵庫県	61(11.4%)	117(14.9%)	-56
広島県	176(33.0%)	161(20.5%)	15
1975年			
大阪府	82(19.2%)	102(22.1%)	-20
兵庫県	50(11.7%)	46(10.0%)	4
広島県	74(17.3%)	68(14.7%)	6
1985年			
大阪府	49(8.7%)	66(9.3%)	-17
兵庫県	167(29.6%)	219(31.3%)	-52
広島県	133(23.6%)	142(20.1%)	-9
1995年			
大阪府	44(7.5%)	55(10.1%)	-11
兵庫県	111(18.8%)	135(24.7%)	-24
広島県	115(19.5%)	108(19.7%)	7
2000年			
大阪府	47(8.9%)	68(12.9%)	-21
兵庫県	79(15.0%)	86(16.4%)	-7
広島県	94(17.8%)	106(20.2%)	-12

(注) 3府県から高梁市への転入者数と高梁市から3府県への転出者数である。括弧内の数字は、それぞれの年における県外からの転入者総数ないし県外への転出者総数を母数としたパーセンテージである。

兵庫県からの転入者や両県への転出者であることが表4と表5から分かる。1965年を例に引けば、大阪圏から高梁市への転入者は195人で、その内訳は大阪府から116人、兵庫県から61人であるから、京都府からは18人にすぎない。同年における高梁市から大阪圏への転出者は385人で、その内訳は大阪府へ230人、兵庫県へ117人であるから、京都府へは38人にすぎない。

また、表5から、1965年と1975年には大阪府との間で転入者と転出者が多いが、その後の1985年、1995年、2000年には兵庫県との間で転入者と転出者が多いことを読み取れる。一部の数値をあげれば、1975年には大阪府から高梁市へ82人が転入し、兵庫県からは高梁市へ50人が転入した。同年に、高梁市から大阪府へ102人が転出し、兵庫県へは46人が転出した。ところが、1985年には大阪府から高梁市へ49人が転入したが、兵庫県から高梁市に転入した人数は167人にもものぼった。また、高梁市から大阪府へ66人が転出したが、高梁市から兵庫県へ転出した人数は219人もいた。このように、1985年以降は、大阪圏の中でも高梁市に地理的に近い兵庫県との間で、転入者や転出者が多くなっているのだ。

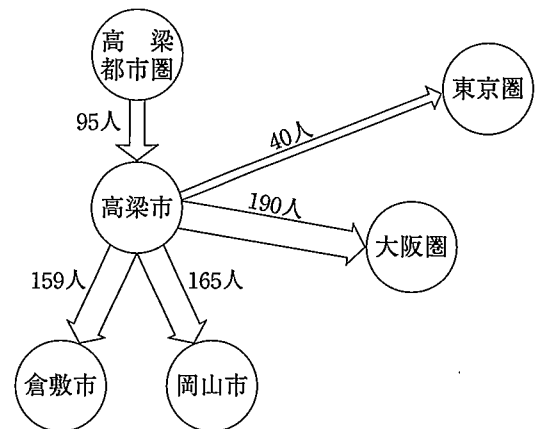
それから、中国地方との間の転入者や転出者はその多くが広島県との間の転入者や転出者であることも表5から分かる。例えば、1965年に中国地方から高梁市へ214人が転入したが、そのうちの176人が広島県からである。また、同年に205人が高梁市から中国地方へ転出したが、そのうちの161人が広島県へ転出した。

第2に、純移動数を時系列的に検討する。表3から、高梁市は関東地方や近畿地方との純移動数がいずれの年でも負であり、両地方へ転出超過であること、および、近畿地方との純移動数の絶対値がやはりいずれの年でも比較的大きいことを読み取ることができる。次に、表4で3大都市圏ごとに見てゆくと、いずれの年においても、高梁市は3大都市圏との純移動数が負であり、3大都市圏へ転出超過であることを看取できる。最も転出超過の人数が多い大都市圏は、1975年だけは東京圏であるが、これ以外の年では大阪圏である。大阪圏への転出超過の人数は1965年に190人、1985年に62人と多いけれど、1975年には17人、1995年には36人、2000年には27人と少ない。その人数は景気のよい年に大きくなり、不景気の年に小さくなっているから、高梁市と大阪圏との間の純移動数は景気によって影響されているといえる。

6 1965年と2000年における純移動数の流れの比較

これまでデータを詳細に検討したために、1965年と2000年の間に起こった地理的移動をめぐる1つの大きな変化を十分に言及することができなかった。この変化を指摘するために、1965年と2000年における純移動の大きな流れ（30人以上）だけを図示し、図2に示す。同図によれば、1965年には

【1965年】



【2000年】

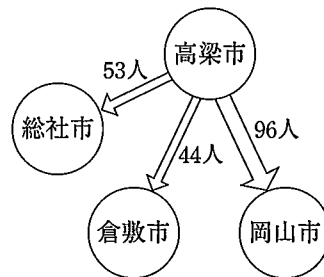


図2 地理的移動の流れ

出所：『岡山県人口の動き（毎月流動人口調査から）』昭和40年度と平成12年度より作成

（注）純移動数が30人以上の流れのみを図示した。

高梁市は高梁都市圏から人口を受け入れ、県内の岡山市や倉敷市、および、県外の大阪圏や東京圏へ人口を送り出していたことが分かる。つまり、高梁市と県内との間の移動によって高梁市周辺の町の人口が減少し、県南の地方中核都市の人口が増加しただけでなく、高梁市と県外との間の移動によって大阪圏や東京圏の人口が増えていたのである。ところが、2000年にはこの流れは大きく変化し、高梁市は県内の岡山市、倉敷市、総社市へ人口を送り出すだけとなった。このように、最近では、高梁市と県外との間の移動によって県外の各地方や大都市圏の人口が増減するということはほとんどなくなり、高梁市

と県内との間の移動によって県南の地方中核都市とその近郊住宅地の人口が増加するだけとなった。

7 要約

本稿では、高梁市における人口の地理的移動のデータを時系列的に見てゆき、同市の地理的移動を検討した。1965年、1975年、1985年、1995年、2000年のデータを検討することによって、次の6点を明らかにした。

- (1) 高梁市と県内にある他の市町村との間で転入や転出をする人々の割合が最近になるにつれてだんだんと低くなる傾向がある。県外からの転入率は、1985年、1995年、2000年に高かった。そして、県外への転出率は、景気のよかった1965年と1985年に高かった。総転入率は1985年に最も高く、1975年や2000年に低かった。総転出率は景気がよかった1965年と1985年に高かった。
- (2) 純移動数で見ると、県内との移動はずっと転出超過であり、1975年にそれが最も大きかった。県外との移動は1965年、1975年、1985年に転出超過であり、景気のよかった1965年と1985年に県外への転出超過が大きかった。1995年には県外から若干の転入超過となり、2000年にはそれはほぼ0となった。県内と県外とを合わせた総純移動数では、いずれの年でも転出超過であった。転出超過は1965年から1995年まではだんだんと小さくなっていったが、2000年には1995年よりも少し大きくなった。
- (3) 1965年、1975年、1985年には、県外からよりも県内から多くの転入者があったが、1995年と2000年に県外からの転入者が県内からの転入者よりも多くなった。転出者についての傾向は一貫しており、県内への転出者のほうが県外への転出者よりもいずれの年でも多かった。そして、いずれの年においても、県外との移動よりも県内との移動が地理的移動による高梁市の人口増減に大きな影響を及ぼした。
- (4) 高梁市は岡山市、倉敷市、高梁都市圏との間で転入者や転出者が多かった。最近では、総社市との間で転入者や転出者が多くなっている。純移動数で見ると、高梁市は新見市と高梁都市圏から人口を受け入れ、岡山市、倉敷市、総社市へかなりの人口を送り出してきた。ただし、1995年と

2000年には、高梁都市圏へいくらかの人口を送り出すように変わった。

- (5) いずれの年においても、高梁市への転入者と同市からの転出者が多い地方は近畿地方（とくに大阪圏）と中国地方（とくに広島県）であった。純移動数で見ると、いずれの年においても、高梁市は3大都市圏へ転出超過であった。最も転出超過の人数が多い大都市圏は1975年だけは東京圏であったが、これ以外の年では大阪圏であった。大阪圏への転出超過の人数は景気のよかった1965年と1985年に多く、不景気であった1975年、1995年、2000年に少なかった。
- (6) 1965年当時は、高梁市と県内との間の移動によって高梁市周辺の町の人口が減少し、県内の岡山市や倉敷市の人口が増加しただけでなく、高梁市と県外との間の移動によって大阪圏や東京圏の人口が増えていた。ところが、2000年には、高梁市と県外との間の移動によって県外の各地方や大都市圏の人口が増減するということはほとんどなくなり、高梁市と県内との間の移動によって県内の岡山市、倉敷市、総社市の人口が増加するだけとなった。

この分析によって、高梁市からの転出者に関して次のことを明らかにした。高梁市からの転出者は県外よりも県内に多く移動しており、県内への転出者の大半は県南にある岡山市、倉敷市、総社市に移動していた。県外への転出者も大阪圏や広島県への移動者が多かった。大阪圏の中では、1965年と1975年には大阪府への転出者が多かったが、1985年以降は兵庫県への転出者のほうが多くなった。約言すれば、高梁市からの転出はこれまで近距離移動が多かったのである。筆者が冒頭で言及した調査（野邊2003）によれば、高梁市に住むの高齢女性の別居子のうち、高梁市外に居住している別居子の多くは県内の岡山市、倉敷市、総社市や近畿地方に住んでいた。このことは、本稿で明らかにした転出者の移動先の動向によって説明できる。転出は近距離移動が多いという動向が近い将来も続くとするれば、高梁市に住む高齢者の別居子はその多くが近くに居住するから、大半の高齢者にとって別居子からソーシャル・サポートを入手することはそれほどむずかしいことではないと予想できる。

注

- 1) 高梁市の概要については、野邊(1998)を参照。
- 2) それぞれの年における高梁市の国勢調査人口は、表6の通りである。

表6 高梁市の人口の推移

(単位：人)		
年	人 口	対1965年比率(%)
1965年	31327	(100%)
1975年	27701	(88.4%)
1985年	26553	(84.8%)
1995年	26072	(83.2%)
2000年	25374	(81.0%)

(出典) 各年の国勢調査。

引用文献

- 野邊政雄 1998.「高梁市についての研究ノート」『岡山大学教育学部研究集録』第108号 141-152頁 岡山大学教育学部.
- 野邊政雄 2003.「地方小都市の高齢女性と別居子の関係」『ソシオロジ』第47巻 第3号 55-69頁 社会学研究会.
- 岡山県企画部統計課 1966.『岡山県人口の動き(毎月流動人口調査から)―1965年度―』岡山県企画部統計課.